

今回のヨーロッパ出張は連日、友人たちと会いながら、国立公文書館と外務省文書館へ通うという、いつものパターンではありましたが、移民・難民問題で揺れるイタリアの異なる側面を見る機会ともなりました。

知り合って30年以上になるドイツ人研究者ルッツが、ローマ近郊にある彼の別荘に連れていってくれたのは印象的でした。いつものことながら忙しい彼は、直前までつかまらず、帰る2日前の週末に別荘のあるCaprarolaへ行くから是非一緒にどうか、急に誘われました。世界遺産のFarnese宮殿がある同地は、極右政党のMSIが昔から強い地域ながら、彼の新しいパートナーCinziaは、出身地のシチリアから職人たちまで連れてきて、大規模な改装を長期間やっていました。しかも、面白いのは単なる別荘ではなく、「芸術家の家」を作りたいということで、EUのエラスムス奨学金を受けた芸術家たちを宿泊させて、創作活動をしてもらうという試みをしています。

訪ねた時も、ルーマニアからの画学生を5人受け入れていて、彼らが帰るに際して小さな展覧会を、その家でやるという活動までしています。そうしたバタバタしている状況の中へ私は突然闖入することになりました。ルッツと昼食を取ろうと一緒にいった工務店の友人はローマ出身ということが分かります。しかも前妻はルーマニア人で、娘のためにCaprarolaへ移ってきて離婚した後も住んでいるとの話でした。実は、ルーマニア人は一時期イタリアにおける最大移民集団であっただけでなく、「ジブシー」として差別されることも多く、微妙に位置づけられがちです。もう一人の建築関係者も南米出身と説明してくれ、極右が跋扈している地域とはいえ、外国人が関わり続ける社会である点が浮き彫りになります。また、ルッツが友人になった人々は、チェルノブイリで両親を失い養子となった外国出身者であったり、その多くがイタリア人でもよそ者であることが判明します。それでも、5人のルーマニアからのアーティストが一定期間生活すると、展覧会には近所の食堂関係者なども来てくれて、何となく日本で報じられる「排外主義ポピュリズムが荒れ狂うヨーロッパ」とは、また違った接触のあり方が展開されている気がしました。

展覧会にローマから集まったルッツの知り合いたちも、今のヨーロッパを象徴するような感じでした。まだ帰国していなかった二人のルーマニア人画学生に、イラン人のエンジニアが裸体画を指して、これは今のイランでは描けないものだと、現在のEU下にあるルーマニアの恵まれた状況を指摘していました。彼はイタリア人をパートナーに持ち、それ以前はドイツで技術者として働いていたと語っていましたが、私はイランの場合、無論、表現の自由が制限されているという問題に直面しているものの、キアロスタミの映画などを見ると、イスラームではタブーの自殺を真っ正面から取りあげており、制約の中で却って非常に緊張感がある作品を生んでいるところもあるのではないか、と聞きました。彼はキアロスタミなどは自分が最も好む創作者と同意していました。ルッツの知り合いということもあり、ドイツ関係者は多かったのですが、帰りに車で送ってくれたのは、ローマのドイツ語学校化学教員で、彼は東独出身でパートナーがアルバニア人と話していました。

現在、ドイツ語学校に通う子供たちの90%は、ドイツ語圏の大学などに進学していると彼は説明していましたが、確かにルッツの子供たちも全員ドイツ、オーストリアもしくはドイツ語とのバイリンガル教

育をしているトレント大学へ進学し、更にロンドン大学の大学院へ秋から入学するとのことでした。これは、現在のイタリアにおいて、いかに高等教育を受けた若年層の失業問題が深刻かを物語っている事例なのかも知れません。化学を教える彼自身、東独出身ということもあり、研究職の選択肢が狭かったことを指摘していました。しかも、差別の対象となりがちなアルバニア出身の妻はドイツで住むことに抵抗感があり、出来るだけ地中海の雰囲気が残る所を希望しているとのこと、この先、ローマ以外だと、ミラノやアテネに移る可能性を語っていました。

偶然、ルッツの周りの人たちが複雑なバックグラウンドを持っているという訳ではなく、今回ロンドンの文書館で再会したナポリ出身のパウロは、職がないためベルリンで奨学金を受けて生活をしており、奥さんはそれでもナポリ料理しか作らないと失笑していました。彼は2002年のジェノヴァ・サミットの反グローバル・デモに参加していましたが、同時にナポリにいる頃は移民の人たちにイタリア語を教えるヴォランティアをやっていたと話していました。最後の晩にあっていたパットは、年金生活の合間にアルバニアから移民してきた青年の定住を手助けするヴォランティアをしており、難民だけが劣悪な状況に追い込まれている訳ではないと指摘します。

コンスタンツでの枢軸をめぐる国際会議で同席したパオロとロンドンで再会して、彼の左翼運動について聞かされたように、戦後イタリア共産党の活動に邁進しながらも、インドに出かけたり常に国際的に開かれた感覚ともつパットが、移民支援についてローマで熱く語るのを聞いていると、今の日本の閉ざされ加減がどうしても気になってきます。同様に、去年はロンドン、今回はローマであったジャニスは今や年金生活に入ったものの、イタリア人の妻と一緒にロンドンとローマを行ったり来たりしています。国際的公衆衛生機関に夫婦で働いていたジャニスは、Brexitの余波で機関本部がアムステルダムに移ることになり、引っ越しをしなければならない、とぼやいていましたが、彼自身はベネズエラ出身で、奥さんがイタリア人、子供二人はイギリスで教育を受けるという家庭で、何語で家では喋っているのかを聞いたところ、スペイン語、イタリア語、英語がごっちゃと言っていました。その彼の娘さんは、大学院時代にスリランカ内戦で心に傷を負った子供たちを現地でケアする活動をしていたそうで、現在はロンドンの白人貧困地域でケースワーカーをしているとのことでした。

イタリアから帰国後、すぐにとって返して9月25日に行われたコペンハーゲンのミュンヘン会議80周年国際会議から戻って来たところですが、初めての北欧も印象も、やはり多民族社会、そして多様性を許容する社会ということでした。確かにイギリス、イタリア、ドイツほど多くの「外国人」が目立つ訳ではないものの、民族的・性的差異などを越えた寛容な社会をいかに形成していくか、という問題に多くの試みが続いていると実感しました。会議に参加していた大学院生に聞いたところ、学費が無料だけでなく生活費さえ支給されるという恵まれた条件で勉学が続いていると話しており、政府の教育に対する姿勢に感銘を受けました。また、会議の組織を担っていた女性に、今回の会議には男性の教員しかいなかったが、大学もそうなのかと聞いたところ、テーマが戦争だったからではないですか、とあっさり否定され、それでもまだ30%くらいしか女性教員がいないと嘆いていました。空港へ行く地下鉄の切符がう

まく買えず、機械の前でうろうろしている私に、丁寧な説明をして無事買えると一緒に喜んでくれたのは、アルバニア人の男性でした。無論、こうした断片的な印象だけで個々の社会を評するのは問題がありますが、今回改めて7月下旬に始まったヨーロッパ滞在を介して、何を優先順位の上にするのかという点について、示唆されることは多かった気がします。

ヨーロッパ内で深刻になっている他者との対話をどのようにしていくのか、社会の中で何を優先させるべきなのか、といった大問題についてヨーロッパでは、それなりに多くの人たちが自分たちなりの回答を模索していると実感しました。確かに今の先進諸国は、多くの社会・政治的危機に直面しており、同時にかつての如く欧米であるから優越しているという議論は、極右であってさえ慎重に避けているのも事実です。そうした中で、ヨーロッパの友人たちが一人の市民として様々な試みを行っていることは励まされるだけでなく、自分がどれだけそうした行動を取っているかという自省の念も含め、考えさせられます。